

外国語植物名同定の諸問題

—異文化理解のワンステップ—

山 原 芳 樹

(1998年10月15日 受理)

I. 序 文

詩であれ、小説であれ、あるいは風俗・習慣を記した解説であれ、また旅行記や日記であれ、文献を読むと植物名が登場してくる場面は数多い。日常生活にあっても植物は様々な形で現れてくる。食卓に上る植物、祝祭・吉事に利用される植物、山川そして森林の中にも、田畑・庭園・花壇にも植物は満ちている。生け花や茶道、俳諧・歌曲・絵画の世界でも、植物は深い意味を有する。

地上には生物だけでも150万種以上にのぼる種が、認識され、記載されてきた。¹⁾ その中のほぼ1/6が植物であり、まだ発見されていない未知の植物がたくさんある。人間が利用している植物は、この多様な生命世界のほんの一部に過ぎない。その一部についてでさえ、「正しい」名前で表記することには色々な困難がついて回る。ましてや、これを外国語で表すことになると、その困難は一層大きくなる。

モノとナマエを一致させようとする試みには長い歴史がある。多くの植物は記紀の時代から取り上げられている。万葉の時代にはどんな植物が利用されたか、の研究は今でも継続している。西欧でもテオフラトスやプリニウスの時代から、植物ハンターの活躍した時代を経て、現代の遺伝子植物学・分子植物学的研究による分類学に至るまで膨大な資料が存在している。中国でも伝説の黄帝の世から殷周秦の時代を経て、西暦500年頃にはすでに漢方の本格的な原典である「神農本草経」が著されている。²⁾ 過去の情報を整理し、日毎に更新される多量の新知識を分類し、一つずつの「モノ」に「ナマエ」をつけるとという際限のない壮大な試みが休む間もなく行われている。こうした苦勞の成果である事典や辞書、図鑑が数多く出版されていることは、ある植物を異なる言語空間ではどう呼んだらよいか、相異なる文化の中ではどのように利用され、その社会の中でどんな意味をもっているのか、を調べたい者にとっては、嬉しいことである。この作業が、他の社会、異なる文化を理解するための基礎的資料になると、思うからである。

本論では、植物名を同定したいと思う利用者にとってどのような問題が生じてくるかを、考察したい。植物学を専門的に学んだことのない文系人間が、外国語文献に登場した植物を調べたいと思

うとき、あるいは食卓に上った食材を客人に説明しようとするときに遭遇する混乱が、このテーマを掲げた動機である。

Ⅱ．学名のむずかしさ

万葉集にうたわれた「アサガホ」は、生えている場所や時期、花の色や咲く時間等を検討した結果、「キキョウ」を指す、というのが現在では通説になっている。³⁾ シェイクスピアの作品に登場する「マリーゴールド」は、実は「キンセンカ」のことである、という情報も多くの資料に共通した見解である。植物学、園芸研究あるいは文献学の成果に基づくこうした情報は、作品を解釈するとき重要な要因になる。つまり、冬物語で「マリーゴールド、お日さまとともに床に入り、泣きぬれてお日さまとともに起きる花」は、今はキンセンカ *Calendula officinalis* と呼ぶ植物のことである。現代では marigold・万寿菊と呼ばれるアフリカ・マリーゴールド *Tagetes erecta* あるいはフレンチ・マリーゴールド *T. patula* が、当時は marigold と呼ばれていたキンセンカ *Calendula officinalis* から16世紀以降その名を奪ってしまった、と学名つきで説明がなされる。⁴⁾

ここで我々は(知っている話であるが)周知の植物と、英名、ラテン名、和名、漢字名で表されたナマエを一致させて等符号で結合、すなわち同定しこれを前提にしてテキストの理解を進めていく。マリーゴールドの英名に関しては、時間の差を隔てて、二種の異なる植物のあることを理解するのである。ところが「和名のキンセンカは、本来 *Calendula arvensis* を指す名前でホンキンセンとも呼ばれた。しかし現代ではトウキンセン *C. officinale* が普通に栽培されるので、これをキンセンカとした」⁵⁾とあるのを読むと、和名の方も時を隔てて2種の植物があることになって、事情が少し錯綜してくる。さらに、「最近の研究に拠ると、江戸時代以前にキンセンカ・金仙花・金盞花と呼ばれていた植物は実はアオキリ科のゴジカである」⁶⁾との記載を読むと、「金盞花」を巡る事実関係がそれほど簡単ではない、と言える。

このように等符号で結ばれた関係に疑いが出る場合、あるいは異なるナマエを持つ複数の植物が同じものを指すかも知れぬ、と考えられる場合に混乱が始まる。この問題に直面したとき、われわれは百科事典や辞書、大小の図鑑を頼りに、同定する努力を続けることになる。ラテン語にで書かれる属名と種名の二名式学名は、国際的に認められた共通表記方式である。しかし、この客観的だと思われている表記にも、同定作業を混乱させる要因が存在している。学名は難しいばかりでなく、「変わりやすい」⁷⁾ことである。また植物分類学者の堀田満氏によると、「植物の学名には、自然界に存在した種集団の中の特異な個体が園芸植物にされ、それにもとづいて命名されたものも多い。... 記載されている種と、園芸品種と、そのもとになった自然種の関係が追跡されないと、本当のことはわからない」⁸⁾のだそうである。

以下、文系素人が同定作業に挑戦しようとしたときに、何が混乱を引き起こすか羅列する。

(1) 異なった学名が同一植物を表す場合、あるいは一つの植物に異なる学名がついたケース：

タチアオイ、ハナアオイ	<i>Althaea rosea</i> = <i>Alcea rosea</i>
ムギセンノウ	<i>Agrostemma githago</i> = <i>Lychnis githago</i> = <i>Githago segetum</i>
セツセン	<i>Clematis florida</i> = <i>Anemone japocica</i> = <i>Atragene indica</i>
ヤツデ	<i>Fatsia japonica</i> = <i>Aralia japonica</i>
ハマカンザシ、マツバカンザシ	<i>Armeria vulgaris</i> = <i>A. maritima</i> = <i>Statice armeria</i>
ムラサキハナニラ	<i>Brodiana coronaria</i> = <i>Hookera coronaria</i>

大型の植物百科事典には、科あるいは属の単位で分類法について説明してある。命名者名とともに異名も記載されている。専門家にとっては、*Bignonia Catalpa* L. 1770, *Catalpa bignonioides* Walter 1788, *Catalpa speciosa* Wader と記載された情報からキササゲの学名が時代と研究者によってどのように変遷してきたかを読みとることが可能かも知れないし、その背景にある区分の必然性も理解できるかも知れない。しかし、一般の利用者にとってはこれは楽な作業ではない。

研究者による属の分類法の相違、異名記載の有無、分離名のもつ意味をどう考えたらよいか、は非専門家にとっては難しい課題である。「*Pelargonium*, *Evodium*, *Geranium* をそれぞれ別の属とするか、細分化せずに *Geranium* でまとめるかは、研究者の考え方による、好みの問題である」⁹⁾と語られると、文献を中心にして作業を進めるしかない者としては、困惑してしまう。1933年にベイリーは、混乱にもとづく学名変更の好例として、キイチゴ類のブラックベリーを紹介し、他にもサンザシ属、バラ属、スミレ属、アブラナ属、サイフリボク属を挙げている。¹⁰⁾ タデ属は非常に多様性に富んでいるので、「オンタデ、イブキトランオ、ミズヒキ、シバカズラ、タデ、ミテヤ、イタドリ」の各属に分ける考え方もある¹¹⁾との園芸大事典中の説明も同様に困惑させる。「いかなる植物の分類群も、少なくとも25年おきに再研究される必要がある」¹²⁾とのベイリーの主張は、研究者の良心的な姿勢として理解はできる。なぜなら、未知の植物がまだ多く存在すること、研究方法が精密化し学際的・総合的になっていることを考えると、一つの発見が体系全体の見直しに繋がるかもしれないからである。しかし、一般人が学名を手がかりに外国名を知ろうとするときに、混乱を引き起こす要因の一つにはなる、ただし出版された文献は本格的であればあるほど長い間利用されることになり、比較対照の必要がそれだけ増大するからである。

1753年に出版した「植物の種」において二名式学名をリンネが提唱してからも、この重要性が世間に認められるまでに長い時間のかかったこと、学名出版の先取権を尊重するために、1867年の第1回のパリ国際植物学会でリンネの書を出発点として、植物命名規約がドン・カルドンによって起草されてからもこれが採択されるまでに相当の時間が必要であったこと、1904年以降アメリカには独自の植物命名法が存在していたこと、第5回ケンブリッジの国際植物会議（1930）では調整の結果両者の使用が認められたこと、国際命名規約は常に改訂された最新版が効力を発揮すること、

等を考えると、古い文献を用いて調査するときには、何時どこで発行された資料かを常に留意しなくてはならないことになる。まして、2種以上の言語に互って同定作業を試みようとなると、この仕事は一層複雑になる。上記アメリカに関する事情を小生が知ったのは、1933年にアメリカで出された啓蒙的入門書「植物の名前のつけかた」(著者 L. H. ベイリー)の翻訳が1996年に出てからのことである。¹³⁾

(2) 日本語名が学名に採用されているケース：

日本語を母語とする者が外国語で植物名を言うとき、日本語で承知している対象が学名として採用されている例が数個存在していることは好都合である。

Amana	amana	アマナ属,	Aucuba	auki	アオキ属
Ginkgo	Ginkjo	イチョウ属,	Akebia	akemi	アケビ属
Japonolirion		オゼソウ属,	Kirengeshoma		キレンゲシヨウマ属
Orixa	kokusagi	コクサギ属,	Tsuga	tsuga	ツガ属
Sasa	sasa	ササ属,	Skimmia	shikimi	ミヤマシキミ属
Wasabia	wasabi	ワサビ属,	Hakoneaste	Hakone	ハコネラン属
Shibataea	柴田桂太1877-1948	オカメザサ属			
Ranzania	小野嵐山1729-1810	トガクシシヨウマ属			

イチョウやコクサギ等で誤植がそのまま国際的な名前になってしまったものもあるが、これも学名の持つ一つの側面だと考えれば良い。

(3) 西欧文化に親しむ者にとっては、ヨーロッパの神話に由来する学名も言語種を越えて理解しやすい命名である。いくつか例示してみる。学名(属名), 由来源, 言語, 和名で並べてある。

Hyacinthus	ギリシャ神話	Hyacinthos	ヒアシンス属
Pieris	ギリシャ神話	Pieris	アセビ属
Trollius	北欧神話	Troll	キンバイソウ属
Mentha	ギリシャ神話	Menthe	ハッカ属
Daphne	ギリシャ神話	Daphne	ジンチョウゲ属
Paeonia	ギリシャ神話	Paeon	ボタン属
Dryas	ギリシャ神話	Dryas	チョウノスケソウ属
Hyacinthus	ギリシャ神話	Hyacinthos	ヒアシンス属
Circaea	ギリシャ神話	Kirke	ミズタマソウ属
Lycoris	ギリシャ神話	Lycoris	ヒガンバナ属
Andromeda	ギリシャ神話	Andromeda	ヒメシャクナゲ属
Leucothoe	バビロニア神話	Leucothoe	イワナンテン属
Amaryllis	ギリシャ神話	Amaryllis	アマリリス属

(4) また、学名の中にはギリシャ・ローマ時代に用いられて名前がそのまま学名に採用されてものも多い。

Acacia akantha	Gr.	刺す,	Agave	agaue	Gr.	高貴な
Aloe alloeh	Arab.	苦い,	Ananas	ananas	Brazil	現地名

Asparagus	asparagos	Gr.	植物名,	Lotus	lotus	Gr.	植物名
Calendula	calendae	Lat.	月,	Castanea	kastanen	Gr.	栗
Chrysanthemum		Gr.	金,	Clematis	clema	Gr.	小枝
Cleome	kleio	Gr.	閉じる,	Cocos	coco	Port.	猿
Coffea	Caffa	Ethi.	コーヒー,	Colchium	Colchis	黒海	地名
Crocus	crokos	Gr.	サフラン,	Cucurbita	cucumis	Lat.	瓜
Fatsia	fatsi	Jap.	8,	Hyazinthus	mythos	Gr.	神話
Jasminum	ysmyn	アラブ	植物名,	Lilium	lerion	Gr.	ユリ
Luffa	luffa	Arab.	植物名,	Lupinus	lupus	Lat.	狼
Malva	malache	Gr.	やわらげる,	Tulipa	tulipan	Per.	頭巾
Mentha	mythos	Gr.	ハッカ,	Paris	par	Gr.	等しい
Passiflora	passione	Lat.	情熱花,	Perilla	perill	東インド	現地名
Petunia	petum	Braz.	タバコ,	Platanus	gr	Gr.	植物名
Populus	lat	Lat.	植物古名,	Portulaca	portura	Lat.	入りの輪小形
Quisqualis	lat	Lat.	疑問文,	Reseda	resedare	Lat.	鎮める
Rhododendron	rhodon	Gr.	バラの木,	Scabiosa	scabies	Gr.	疥癬
Smilax	gr	Gr.	植物名,	Thea	tcha	中国	茶

Ⅲ．和名表記の問題点

(1) 漢字表記について：

混乱する理由の一つが、漢字である。例えば、アジサイ（紫陽花）、バレイショ（馬鈴薯）、クスノキ（楠）、檜（ヒノキ）、欒（ケヤキ）等の漢字が表す植物では、中国では別種である。この例は、「頗る多い」そうである。¹⁴⁾ 若干の例をあげてみる。

和名・和漢字の「クスノキ 楠・樟」は中国漢字名「楠 タブノキの類 交譲木」を指し、「ユズリハ 交譲木」は「山黄樹」。「シャクナゲ 石楠花」は「オオカナメモチ 石楠花」。「チャンチン」は「香椿」, 「椿」は「海榴」, 「ツバキ」は「山茶（花）」, 「山茶花 サザンカ」は「梅茶」。「アジサイ」は「綉球花」, 「ライラック」が「紫陽花（白楽天）」。「モクセイ 木犀」は「桂」。

「センダン」は双葉よりかんばし」と西行が言うセンダンは、ジャクダンが正式の植物名とされている。しかし、この両者について語るときも要注意である。すなわち、以下の関係があるからである。

センダン・アウチ	梅檀・棟・樗	棟樹・苦棟	Melia azedarach
センダン・ジャクダン	白檀・梅檀	檀香	Santalum album
ジャクダン		側柏	Thuja orientaris var. falcata
ニワウルシ・シンジュ	樗	樗・臭椿	Ailanthus altissima

牧野富太郎は、「珍説クソツバキ」と題して、樗を「アウチ」と読ませた例を痛烈に批判して

いるが、昭和18年「植物記」初版の時代から半世紀以上過ぎた今でも、この樗をアフチと読ませる解説が植物百科に登場しているし、またとりわけ季語として俳諧の世界では定着している。呉茱萸 *Euolia ruticarpa* は、グミ *Elaeagnus* 属とは異なる。しかし、季語の世界では アキグミ (秋茱萸) として用いられる。その他、柏・栢・檉・榲・櫟とカシ・カシワ、枳・椶・枳と七葉樹の関係等、植物分類学の立場は、季語の用例に対して寛容である。しかし、普通名で表されている植物の世界を調べようとすると、混乱を招く一要因となっている。

(2) カタカナ表記について：

現在は、植物和名はカタカナ表記することを規則としているため、上記の勝手解釈は回避できるものの、別種の混同が生じてくる。すなわち、ツメクサ (爪草・詰草?)、カンゾウ (甘草・疳草?)、キイチゴ (黄イチゴ・木イチゴ?)、ツマトリソウ (妻取草・棲取草・爪鳥草?) 等である。

ハナニラ (*Ipheion uniflorum*) は、ニラ (*Allium tuberosum*) の若い花茎と蕾を指すハナニラと同音である。ハナダイコンは二種の植物を指す。すなわちムラサキハナナ (*Orychophragmus violaceus*) と、ハナダイコン (*Hesperis matronalis*) である。前者はオオアラセイトウ、ショカツサイ・諸葛菜とも呼ばれ、一般にハナダイコンの名を当てているが、多くの資料ではこの一般名は不適当であるとの注釈がつく。後者は、英名で *dame's rocket*, *sweet rocket*, *dame's violet* であり、独名では *Nachtviole* である。付言すると、同じアブラナ科の植物で *Mondviole*, *Silberblatt* と呼ばれる *Lunaria annua* は、和名ゴウダソウ・合田草であり、英名は *honesty*, やはり紫色の花を咲かせる。

ナンジャモンジャノキも二種類の植物に用いられる。一方でクスノキ (*Cibbomomum camphora*) に対して、他方でヒトツバタゴ (*Chinonanthes retusus*) に対してである。

カンランに至っては4種類が存在する。すなわち、キャベツ類を指すカンラン・甘藍、カナリアノキ (*Canarium vulgare*) を含むカンラン・橄欖科植物。そしてラン科のカンラン・寒蘭 (*Cymbidium kannran*)。さらにオリーブを指すカンラン (もっともこれは誤用だそうである)。キュウケイカンランは、球形甘藍ではない、球茎甘藍のことでコールラビ別名カブカンランのことである。牧野富太郎が明治20年以来主張したカタカナ表記法は、別の問題を素人にもたらしめていることになる。

また、全てカタカナ書きにしたため、意味を理解するのに少し時間が必要な植物名もある。シロバナヨウシュチョウセンアサガオよりは白花洋種朝鮮朝顔と書いた方が、読みやすい。そのせいか、カタカナ表記に加えて、しばしば漢字表記が添えてある資料が多い。カタカナ表記によって中国語との混乱は避けられるが、さらに別な問題が生じている。すなわち、「クサレダマ 草蓮玉」を「腐れ玉」, 「チダケサシ」を「血竹刺」と解する例である。

(3) 園芸名について：

園芸名にも混乱を招く要因がある。イソマツ属 (*Limonium*) のハナハマサジ (*L. sinuatum*) は、旧学名のスターチスが、園芸名として用いられているうえに、英語・仏語名でも *statice* が使われている。フウロソウ属 (*Geranium*) は、花弁数と雄蕊数の相違によって *Geranium* 属と *Pelargonium* (テンジクアオイ属) とに分離したが、園芸名としては両者にゲラニウム (ゼラニウム) が用いられる。

テンジクアオイ属 *Pelargonium* の名はギリシャ語で「コウノトリ」を意味する *pelargos* から来ており、フウロソウ科 *Geraniaceae* およびフウロソウ属 *Geranium* はギリシャ語 *geranos* (ツル・鶴) に由来しているとされるが、ドイツ語でこの科および属に用いる *Storcheschnabelgewächse* とは、直訳すればコウノトリ科である。他方フウロソウ科に入るオランダフウロは、学名を *Erodium cicutarium*, ギリシャ語のアオサギ・青鷺 (*erodios*) そのまま *Reiherschnabel* とドイツ語訳にしている。いずれも柱頭と子房、あるいは果実の形態がそれぞれの鳥の頭と嘴に似ていることからつけられたものである。そして *Geranium* これもまた、区別するときに混乱を引き起こす原因となる。

園芸上のポトスは、ヒメハブカズラ (*Phaphidophora*) を指すが、植物学上の *Potos* は、ポトス属 (ユズリハカズラ) である。シャクナゲ、ツツジ、サツキは、現在はいずれも *Rhododendron* 属にまとめられているが、常緑か否かと雄蕊の数で *Azalea* 属が導入されたものの、そう簡単に区分できぬ品種が見つかって、前者に統一されたものの、園芸種にはアザレアの名前が残っている。つまり、日本原産のツツジ類がヨーロッパで改良されたものが特にこう呼ばれている。

Portulacaria afra は、ドイツ語では *Speckbaum*, *Strauchportulak* で表される。対応する園芸名は銀杏樹、銀杏木である。ドイツ語使用圏側から見たとき、銀杏 (*Ginkgo biloba*) と間違えない方が不思議といえる。

園芸名ではないが、アメリカでポプラ材として流通している建築材は、実はユリノキ (*Liliodendron tulipifera*) だそうである。tulip poplar, yellow poplar と聞いて、本当の木の名前を知ることは難しい。

(4) 普通名・俗名について：

普通名・俗名になると混乱を誘引する要因の数が一層増える。これは言語種の如何を問わずに言えそうである。

- (1) 和名では、〇〇サクラ、〇〇キク、〇〇ボタン、等で終わる別種の植物が多い。〇〇アオイもその一つである。すなわち、カンアオイ (*Asarum*) 属のフタバアオイ (カモアオイ)、カンアオイ。ゼニアオイ (*Malva*) 属のジャコウアオイ、ウスベニアオイ、ゼニアオイ、フユアオ

イ。タチアオイ (*Alcea*) 属のタチアオイ。アオイ科フヨウ (*Hibiscus*) 属のモミジアオイ、ソコベニアオイ。同じくアオイ科のトロロアオイ (*Abelmoschus*) 属のトロロアオイ。ビロードアオイ (*Althaea*) 属のビロードアオイ。フウロソウ科・テンジクアオイ属 (*Perargonium*) のテンジクアオイ。ハナアオイ (*Lavatera*) 属のモクアオイ、ハナアオイ等は、いずれも異なる種である。また、アオイ科のムクゲ (*Hibiscus syriacus*) は、英語名では *althae* となっていて、注意しないと混乱する。さらに、タチアオイ (*Alcea*) は、ビロードアオイ (*Althaea*) を含めて分類する立場もある、¹⁵⁾とのことであるから、調べる文献によって留意が必要となる。

例えば、「梨棗 黍に栗嗣ぎ 延ふ田葛の 後も逢はむと 葵花咲く」と万葉集にある「葵花」について、「歌の植物が食用で連ねられていると見る人々は、葵はアオイ科の野菜のフユアオイとする。一方、このアオイを『源氏物語』で名高いウマノスズグサ科の加茂葵(フタバアオイ) ととる人は、クズもフタバアオイも蔓性なので、ツルが分かれても後に逢おうとかける歌の真意から、立性のフユアオイはふさわしくないと見る」¹⁶⁾と指摘する湯浅は、これはカラアオイと見たい、と述べている。

ウツギも幾つかの別種を含む植物名である。ウツギ (*Deutzia*) 属のウツギ、ヒメウツギ、マルバウツギ。パイカウツギ属のパイカウツギ 梅花空木=サツマウツギ (*Philadelphus satsumi*)。ノリウツギ (*Hydrangea paniculata*)。タニウツギ (*Weigela*) 属のハコネウツギ、ニシキウツギ、ヤブウツギ。フジウツギ (*Buddleia*) 属のフサフジウツギ、トウフジウツギ。その他、ドクウツギ、ミツバウツギ、コゴメウツギ。

例示したのは同名で終わる種類が多いので目立つものだが、カイドウ (ハナカイドウ)、シュウカイドウ、カマクラカイドウはそれぞれ別種の植物であり、ワラビ、ハナワラビ、ミズワラビもそれぞれ別種である。コケモモ、ヤマモモ、フトモモはいずれもモモとは無関係の植物である。そして、ニラの花芽はハナニラであるが、ワラビとハナワラビの間にはこの関係は当てはまらない。

ヤグルマギク (*Centaurea cyanus*) は、またヤグルマソウとも呼ばれる。これはヤグルマソウ (*Rodgersi podophylla*) とは別種である。

アカシア属の中には、ミモザアカシア (*Acacia decurrens*) とフサアカシア (*A. dealbata*) として知られている種がある。後者は、フランスではミモザとして知られ、ミモザ祭りに使われる。他方、ミモザ (*Mimosa*) 属の *Mimosa pudica* はオジギソウを指し、同じマメ科であるが他の植物である。なお、アカシアの花は黄色、オジギソウはピンク。白花のニセアカシア (*Pseudacacia*) をアカシアと混同することも多い。

(5) 地名・国名の取り扱い

俗名・普通名にあって、地域や国の名前がつくものがある。例えば、Elsevier が挙げる10045個

のドイツ語名植物のうち、国別につく形容詞あるいは接頭語を見ると Japan(81), China(77), Amerika(31), Siberien(26), Indien(25), Kanada(25), Deutsch(24), Spansich'(21), Italien(19), Orient(16) と並ぶ。¹⁷⁾この数は、「普通・一般の」を表す形容詞 *gemien* が263例, 「本当の・真の」を意味する *echt* が187例も登場しているのに比べるとそれほど多くはない。これは、しかし、ドイツが原産地でない植物であることを暗示している名前でもある。この「日本」とついた植物の中には、本来は中国より日本に渡来したものも多く含まれ、植物ハンターが日本で発見したも際に原産地と誤解したものもある。

英語園芸名に国名を冠する以下の植物も原産地は括弧内のもので、形容的に用いられた地域名は実際の生育地とは無関係である。African marigold (メキシコ), Portugal cypress (メキシコ), Cherokee rose (ナニワイバラ・中国), Arabia jasmine (マツリカ・インド), Spanish jasmine (ソケイ・インド), Spanish cedar(西インド), Peruvian squill(地中海), Californian peppertree (コショウボク・非カルフォルニア), Bethlehem sage (非イスラエル) 等。

地名を掲げた植物名の中には、遠い異国の地を漠然と意味する形容詞として用いられているものも幾つかある。ベイリーによれば、イスラエルを指す Jerusalem を冠する次の植物は、イスラエルを原産地とはしていない例である。Jerusalem cowslip (ブルモナリア), Jerusalem oak (pigweed / アマランサス類・アフリカ), Jerusalem sage (フロミス・南欧), Jerusalem thorn (南欧～中国, 熱帯アメリカ), Jerusalem corn (ナイル川流域), Jerusalem artichoke (キクイモ・北米) 等。¹⁸⁾

和名植物名にも、この種の例を挙げることができる。チョウセンアサガオ (熱帯アジア), チョウセンアザミ (地中海中西部地方) は朝鮮とは無関係である。しかし、チョウセンニンジン, チョウセンゴミシ, チョウセンレンギョウは朝鮮に自生している植物である。他方, 「オウシュウ」「ヨーロッパ」「セイヨウ」「ヨウシュ」を冠した植物は数が多く、また欧州原産のものが殆どである。その形容詞的用法にはいかなる規則性があるのだろうか、見てみたい。

1. 「セイヨウ」「オウシュウ」「ヨーロッパ」のいずれでも構わないと思われる命名群

1-1	学名	和名
	<i>Castanea sativa</i>	セイヨウグリ, ヨーロッパグリ
	<i>Pinus sylvestris</i>	オウシュウアカマツ, ヨーロッパアカマツ
	<i>Prunus domestica</i>	セイヨウスモモ, ヨーロッパスモモ
	<i>Ribes grossularia</i>	ヨーロッパスグリ, セイヨウスグリ, オオスグリ
	<i>Taxus baccata</i>	セイヨウイチイ, ヨーロッパイチイ
	<i>Ulmus glabra</i>	セイヨウニレ, オウシュウハルニレ
1-2	<i>Paeonia officinalis</i>	オランダシャクヤク, セイヨウシャクヤク
	<i>Populus italica</i>	イタリアヤマナラシ, セイヨウハコヤナギ,
	<i>Quercus robur</i>	ヨーロッパナラ, イギリスナラ

	Picea	abies	ドイツトウヒ, オウシュウトウヒ, ヨーロッパトウヒ
1 - 3	Ribes	grossularia	セイヨウスグリ, マルスグリ Eng. gooseberry
	Ribes	grossularia	ヨーロッパスグリ, セイヨウスグリ, オオスグリ Euro. gooseberry, catberry

2. 「オウシュウ」「ヨーロッパ」「セイヨウ」のそれぞれによって区分していると思われるもの

2 - 1	Ulmus	procera	オウシュウニレ English elm
	Ulmus	glabra	セイヨウニレ, オウシュウハルニレ com. elm
	Ulmus	glabra	セイヨウハルニレ, エルム Scotch elm, Wych elm
	Ulmus	minor	ヨーロッパニレ, エルム sleeping elm
2 - 2	Populus	italica	セイヨウハコヤナギ Lombardy poplar
	Populus	tremula	ヨーロッパヤマナラシ Euro. aspen
2 - 3	Rubus	fruticosus	セイヨウヤブイチゴ Euro. blackberry
	Rubus	idaeus	ヨーロッパキイチゴ Euro. red raspberry

3. 「セイヨウ」のみが使われているもの:

	Strax	officinale	セイヨウエゴノキ
	Hypericum	perforatum	セイヨウオトギリ (ソウ)
	Hedera	helix	セイヨウキヅタ
	Nerium	oleander	セイヨウキョウチクトウ
	Crataegus	oxyacantha	セイヨウサンザシ
	Tilia x	europaea	セイヨウシナノキ
	Taraxacum	officinale	セイヨウタンポポ
	Aesculus	hippocastanum	セイヨウトチ (ノキ), ウマグリ, マロニエ
	Fraxinus	excelsior	セイヨウトネリコ
	Sorbus	aucuparia	セイヨウナナカマド
	Sambucus	nigra	セイヨウニワトコ
	Achillea	millefolium	セイヨウノコギリソウ, アキレウス
	Corylus	avellana	セイヨウハシバミ (ノミ)
	Ilex	aquifolium	セイヨウヒイラギ
	Qercus	ilex	セイヨウヒイラギカシ
	Convolvulus	arvensis	セイヨウヒルガオ
	Cleome	spinosa	セイヨウフウチョウソウ
	Scabiosa	atropurpurea	セイヨウマツムシソウ
	Prunus	avium	セイヨウミザクラ, オウトウ
	Rubus	fruticosus	セイヨウヤブイチゴ
	Mentha x	piperita	ヒヨウハッカ, ペパーミント

4. 「ヨウシュ」が頭につくもの:

	Thymus serpyllum	s. serpyllum	ヨウシュイブキジャコウソウ
	Ajuga	reptans	ヨウシュジュウニヒトエ
	Daphne	mezereum	ヨウシュジンチョウゲ
	Physalis	alkekengi v. alkekengi	ヨウシュホウズキ
	Phytolacca	americana	ヨウシュヤマゴボウ

5. 「ヨーロッパ」が頭につくもの：

Malus	sylvestris	ヨーロッパカイドウ
Larix	decidua	ヨーロッパカラマツ
Rubus	idaeus	ヨーロッパキイチゴ
Ulmus	minor	ヨーロッパニレ、エルム
Allium	porrum	ヨーロッパネギ、ニラネギ、ポロネギ
Fagus	sylvatica	ヨーロッパブナ
Abies	alba	ヨーロッパモミ

いずれも、European, Europäisch に相当する言葉である。セイヨウ、オウシュウ、ヨウシュ、ヨーロッパのいずれでも構わないと、意味上理解してしまうと、第二群で使い分けられていると思われる名称群が現れる。そして更に、それぞれ単独で使用される名称群が存在する。一方において、学名で混乱を避けようとする努力がなされるのに対し、命名の規則性が全く見えて来ないケースである。素人を泣かせるのも、この種の見かけ上の恣意性である。

(6) 方言名について：

方言名を含めた植物名の国際的な比較研究は、極めて魅力的なテーマである。例えば、日本語のツクシには378個の言い方があるという。(日本植物方言言葉、日本植物の会刊行) 他方、名付ける時に、当該植物のどの特徴をみていたのか、その見方に地域的なあるいは文化的な相違があるのか、興味はつきない。しかし、この作業に入る前にやらなくてはならぬことは、標準名の確定である。本校の目的は標準名の対応関係を見るために乗り越えなければならない問題点の考察にあるので、ここでは触れない。

IV. ドイツ語名に関する問題

ドイツ語の植物名を見ると、いくつかのグループに分けることができることに気づく。すなわち、学名をそのままドイツ語読みしたもの（その中には人名に由来するもの、神話からきているもの、国、地域名からきているもの、現地語由来のもの等がある）、ラテン語の意味をそのまま母語表現に置き換えただけのもの、ドイツ語固有の命名、と3種類に大別できる。具体的に検討してみたい。

(1). 学名をドイツ語読みしたもの

1. 人名由来：

以下の植物のように献呈名が属名となっているものは、植物それ自身の特徴とは意味上の関係をもっていないので、素人には記憶しにくい一つの要因でもある。他方、献呈した研究者と献呈された人間との関係に興味を持つ者にとっては、発音に留意するだけで、国際的に通用す

る手段を得たことになる。ドイツ語名は、ラテン語属名末尾 -ia を -ie と書き換えるだけで表されるものが多い。

属名 (学名)	出身国	被献呈者	生存年	属名 (和名)	科名 (和名)
Begonia		S. Domingo			
		Begon, M	1638-1710	シュウカイドウ属	シュウカイドウ科
Alibizzia	it.	Albizzi, F. del	18世紀	ネムノキ属	マメ科
Bougainvillea	fr.	Bougainville, L. R. de	1729-1781	イカダカズラ属	オシロイバナ科
Brunfelsia	ger.	Brunfels, O	1488-1534	バンマツリ属	ナス科
Buddleia	eng.	Buddle, A	1660-1715	フジウツギ属	フジウツギ科
Camellia	cheko.	Kamell, G. J	1661-1706	ツバキ属	ツバキ科
Cattleya	eng.	Vattley, W	? -1832	ヒノデラン属	ラン科
Clintonia	amer.	Clinton, D. W	1769-1828	ツバメオモト属	ユリ科
Commelina	holl.	Commelin, J&K.	1629-98/1667-1731		
				ツユクサ属	ツユクサ科
Dahlia	sweden	Dahl, A	1751-1789	テンジクボタン属	キク科
Deutzia	holl.	Deutz, J. van der	1743-1788	ウツギ属	ユキノシタ科
Dioscorea	gr.	Discirides	A.D. 100	ヤマノイモ属	ヤマノイモ科
Eichhornia	ger.	Eichhorn	1779-1856	ホテイアオイ属	ミズアオイ科
Forsythia	eng.	Forsyth, W. A.	1737-1803	レンギョウ属	モクセイ科
Gleditschia	ger.	Gleditsch, J. W	1714-1876	サイカチ属	マメ科
Hosta	aust.	Host, N. T	1761-1834	ギボウシ属	ユリ科
Houttuynia	holl.	Houttuyn, M	1720-1798	ドクダミ属	ドクダミ科
Kaempferia	ger.	E. Kaempfer	1651-1716	バンウコン属	ショウガ科
Kerria	eng.	J. B. Kerr	1674-1842	ヤマブキ属	バラ科
Kochia	ger.	W. D. J. Koch	1771-1849	ホウキギ属	アカザ科
Lagerstroemia	sweden	M. von Lagerstroem	1696-1759	サルズベリ属	ミソハギ科
Lavatera	schweiz	K. L. Lavater	16 Jhdt.	ハナアオイ属	アオイ科
Leibnitzia	ger.	G. W. Leibnitz	1646-1716	センボンヤリ属	キク科
Lespedeza	amer.	V. M. de Cespedes	18 Jhdt.	ハギ属	マメ科
Lindera	sweden	J. Linder	1682-1755	クロモジ属	クスノキ科
Linnaea	sweden	C. von Linne	1707-1778	リンネソウ属	スイカズラ科
Lobelia	eng.	M. de Lobel	1538-1616	ミゾカクシ属	キキョウ科
Lonicera	den.	A. Lonizer	1528-1586	スイカズラ属	スイカズラ科
Magnolia	fr.	P. Magnol	1638-1715	モクレン属	モクレン科
Matthiola	ital.	P. A. Matthiolo	1500-1577	アラセイトウ属	アブラナ科
Michelia	schweiz.	M. Micheli	1844-1902	オガタマノキ属	モクレン科
Nicotina	fr.	J. Nicot	1530?-1600	タバコ属	ナス科
Patrinia	fr.	E. L. M. Patrin	1742-1814	オミナエシ属	オミナエシ科
Pinellia	ital.	G. Pinelli	1535-1601	ハンゲ属	サトイモ科
Ranzania	jp.	Ono Ranzan	1729-1810	トガクシショウマ属	メギ科
Reineckia	ger.	H. J. Reinecke	1798-1871	キチジョウソウ属	ユリ科

Robinia	fr.	J. Robin	1550-1629	ハリエンジュ属	マメ科
Rohdea, jap.	ger.	Rohde, M	1782-1812	オモト属	ユリ科
Shibataea	jp.	柴田桂太	1877-1948	オカメザサ属	イネ科
Stewartia	eng.	J. Stewart	1713-1792	ナツツバキ属	ツバキ科
Ternstroemia	sweden	C. Terstroem	1703-1745?	モッコク属	ツバキ科
Thunbergia	sweden	C. P. Thunberg	1743-1823	ヤハズカヅラ属	キツネノマゴ科
Torreyia	amer.	J. Torrey	1796-1873	カヤノキ属	イチイ科
Tradescantia	eng.	J. Tradescant	1608 -1662	ツユクサ属	ツユクサ科
Vigna	ital.	D. Vigna	17. Jhd	ササゲ属	マメ科
Weigela	ger.	C. E. von Weigel	1748-1831	タニウツギ属	スイカズラ科
Wistaria	amer.	C. Wister	1760-1818	フジ属	マメ科

2. 学名翻訳：

学名の本来の意味をドイツ語に翻訳したものである。学名をそのまま使用する傾向の強いフランス語圏の植物名と似た名前になる。ドイツ語圏固有の発想だと思いこまないことが必要である。それぞれ語義・独名・学名・(近似種)和名・英名で並べてみる。

山羊の髭	Geißfuß	Aegopodium podagraia	イワミツバ	bishop's sgoutweed
神の樹	Götterbaum	Ailanthus altissima	シンジュ神樹	tree of heaven
砂不死	Sandimortelle	Ammobium alatum	カイザイク	winged everlasting
男髭	Mannsbart	Andropogon virginicus	カルカヤ	bluestem, bloom sedge
美果実	Schönbeere	Callicarpa bodinieri	ムラサキシキブ	beauty mulberry
美茎	Schönfaden	Callistemon speciosus	ブラシノキ	bottle brush
鵞鳥脚	Gänsefuß	Chenopodium album	シロザ, アカザ	goosefoot, fat hen
運命樹	Losbaum, K.-	Clerodendron japonicum	ヒギリ (緋桐)	glory - bower
野卷	Ackerwinde	Convolvulus arvensis	セイヨウヒルガオ	Euro. glorybind
赤角灌木	Hornstrauch, rot.	Cornus sanguinea	ミズキ blood - dogwood, red dogwood	
雲雀爪	Lerchensporn	Corydalis cava	オランダエンゴサク	hollow root
黄色材	Gelbwurz	Curcuma domestica	ウコン, キゾメグサ	turmeric
小舟蘭	Kahnorche	Cymbidium goeringii	シンビジウム, 春蘭	cymbidium
犬舌	Hundszunge	Cynoglossum amabile	シナワスレナグサ	Chin. forget - me - not
指帽子	Fingerhut	Digitalis purpurea	キツネノテブクロ	foxglove
青鸞嘴	Reiherschnabel	Erodium cicutarium	オランダフウロ	red-stem filaree
一日ユリ	Taglilie	Hemerocallis flava	ワスレグサ	yellow day lily
正午花	Mittagsblume	Mesembrianthemum crystallinum	マツバギク	ice plant
奇跡花	Wunderblume	Mirabilis jalapa	オシロイバナ	four-o'clock flower
蛇髭	Schlangenbart	Ophiopogon japonicus	ジャノヒゲ	dwarf lily-turf
酸草	Sauerklee	Oxalis corniculata	カタバミ	yellow wood
鸛嘴	Storchschnabel	Pelargonium zonale	テンジクアオイ	stork's - bill

水泡桜	Blaskirsche	Physalis alkekengi	ホウズキ	ground cherry
苦木材	Bitterholz	Picrasma aquassoid	ニガキ苦木	quassia wood
翼胡桃	Flügelnu	Pterocarya rhoifolia	ノグルミ, サワグルミ	wing nut
石鹸草	Seifenkraut	Saponaria officinalis	サボンソウ	soapwort
石割草	Steinbrech	Saxifraga stolonifera	ユキノシタ虎耳草	Aaron's - beard
老人草	Greiskraut	Senecio cineraria	シロタエギク	dusty miller
三葉草	Dreiblatt	Trillium apetalon	エンレイソウ	wake-robin, trillium
刺燃草	Brennessel	Urtica dioica	イラクサ	dog nettle, nettle
吊鐘花	Glockenblume	Campanula glomerata	ヤツシロソウ	daneblood
広鐘花	Breitlocke	Platycodon grandiflorum	キキョウ	balloon - flower
婦人靴	Frauenschuh, jap.	Cypripedium japonicum	クマガイソウ	lady's slipper
肝臓花	Leberblümchen	Hepatica nobilis	ミスミソウ	liver leaf

(2) ドイツ語名の特徴

1. 神話由来および古代世界に由来するドイツ語名は、すでに学名の章で触れた。

2. ドイツ語固有の命名等

Engelswurz, Engelstrome, Teufelsauge, Teufelsbeere, Teufelswurz, Gottesauge, Götterbaum, Gottesauge, Lebensbaum, Venusfliegenfalle, Mutterdorn, Mädchenauge, Mädchenhaare, Stiefmütterchen, Jungfergras, Frauenschuh, Frauenmantel, Frauenbiß, Frauenholz, Frauendistel, Frauenrose, Vergiß-mein-nicht, Rühr-mich-nicht-an, Je-länger-desto-lieber, Stiefmütterchen, Sankt-Peter-Stab, Fuchsschwanz, Fuchsbeere, Fuchstraube, Gänseblümchen, Gänsefuß, Gänsekraut, Gänsezung, Hasenohr, Hasenkl, Hundsrose, Hunds Zahn, Hundebume, Hundsbeere, Hundskamille, Katzenschwanz, Igelkopf, Igelknöpfchen, Igelkraftwurz, Schlangenbart, Löwenklau (Akanthus), Löwenzahn, Löwenmaul, Löwenschwanz, Geißblatt, Geißbart, Geißkl, Biberkl, Bocksdorn etc.

等々日常生活において使われる興味深い表現がたくさんあるが、これはむしろ方言名との関係で取り上げることになる。

3. △△イチゴに当たる植物名

-beere: -イチゴ 苺

Johannisbeere, Heidelbeere, Blaubeere, Preiselbeere, Maulbeere, Himbeere, Brombeere, Drosselbeere, Kranbeere, Bickebeere, Traubenbeere, Einbeere, Erdbeere, Fuchsbeere, Lorbeer, Knickbeere, Waldeerdbeere, Mehlbeere, Schneebeere, Stachelbeere, Steinbeere, Tintenbeere, Vogelbeere, Gansbeere, Wolfsbeere, Weißbeere, Scheinbeere, Scharlachbeere, Beinbeere etc.

-dorn: -イバラ 茨 荊

Feuerdorn, Weißdorn, Rotdorn, Heckendorn, Gaspeldorn, Bocksborn, Hagedorn,
Weidendorn, Kreuzdorn, Sanddorn, Sauerdorn, Schwarzdorn, Stechdorn etc.

-kraut: -クサ 草

Maggikraut, Sauerkraut, Badekraut, Barbelkraut, Brautkraut (Rosmarin),
Greiskraut, Hexenkraut (Johanniskraut), Bohnekraut, Eisenkraut,
Dullkraut (Teufelswurz), Gurkenkraut, Pfennigkraut, Münzkraut,
Stechkraut (Distel), Wurmkraut (Rainfarn), Schaumkraut, Schellkraut,
Schlafkraut, Seifenkraut etc.

-wurz, -wurzel: -ネ 根

Eberwurz, Bitterwurz, Schwarzwurz, Engelwurz, Bitterwurz, Feigenwurz,
Gelbwurz, Silberwurz (Knoblauch), Pestwurz (Petasites),
Gilgenwurz, Goldwurz, Weißwurz, Kreuzwurz, Rindwurz, Kraftwurz,
Teufelswurz, Zehwurz, Schellwurz, Seekreuzwurz, Siegwurz, Sommerwurz
Tropenwurz, Herzblume (Tränendes Herz; Doppelsporn), Blattwurz,
Pfeilwurz, Igelkraftwurz, Buntwurz, Senegawurz, Zeichenwurz, Beilwurz etc.

-blatt: -ハ 葉

Dreiblatt, Geißblatt, Goldblatt (Aukube), Silberblatt, Riemenblatt,
Tausendblatt etc.

-klee: -クローバー, -ミツバ 三葉

Biberklee, Sauerklee, Weißklee, Rotklee, Süßklee, Hasenklee, Fieberklee,
Gelbklee, Glücksklee, Hirschklee, Honigklee, Hornklee, Katzenklee,
Kleberklee, Schotenklee, Steinklee, Wasserklee, Wiesenklee etc.

-apfel: -リンゴ

Goldapfel (Tomate), Granatenapfel, Liebesapfel (Tomate), Rangapfel,
Rosenapfel, Stechapfel (Datura) etc.

-rose: -バラ

Duftrose, Goldröschen, Pfingstrose, Christrose, Alpenrose, Seerose,
Edelrose, Kartoffelrose, Wasserrose, Heckenrose,
Hundrose, Frauenrose, Sommerrose, Schneeröschen, Windröschen,
Strohröschen (Sonnenflügel), Weinrose, Apfelrose, Teichrose etc.

-kohl: -キャベツ

Beißkohl, Gänsekohl, Gartenkohl, Küchenkohl, Weißkohl, Wirsingkohl,
Rotkohl, Rosenkohl, Chinakohl, Blattkohl, Grünkohl, Kohlrabi,
Blumenkohl, Blumenkohl, Rainkohl etc.

-kirsche: -サクラ

Blaskirsche, Judenkirsche, Korallenkirsche, Kornelkirsche,
Sauerkirsche, Tollkirsche, Weichselkirsche, Straußkirsche (Solanum),
Vogelkirsche etc.

-lilie: -ユリ

Madonnalilie, Feuerlilie, Weißlilie, Maragonlilie, Teichlilie etc.

V. 誤植・誤記の問題

誤植・誤記は、常に存在する古くて新しいテーマである。学名レベルでは、銀杏 *Ginkgo* を *Ginkgo* と誤って伝わった例、あるいはハギ属 *Lespedesia* は、フロリダの総督 Céspedes の誤植である例が園芸書や植物文化史を扱った文献でよく引用される。牧野富太郎は、明治43年に貝原益軒全集が刊行された際、第6巻収載の「大和本草」が原文ではカタカナ交りであったものを平仮名交りで出版した結果生じた誤植や読み間違いを指摘している。¹⁹⁾

本論考の著者には植物に関する専門的知識は欠けているので、内容ではなく説明文中に登場するドイツ語とラテン語に限って調べてみたところ、昭和43年に刊行された本格的な園芸大辞典でも、1988年に発行された園芸植物大辞典でも誤植が散見される。ここに、その誤植パターンをいくつか挙げてみる。括弧内が正しい綴りである。

1. 文字の読み間違い：

Zmetschge (Zwetschge), Wiesenrante (Wiesenraute),
Zweigstechginster (Zwergstechginster), Blauberre (Blaubeere)
K ä chenschele (K ü chenschele), Choenomeles (Chaenomeles)

2. 文字の過剰あるいは不足：

Strunkkolrabi (Strunkkohlrabi), Himbeerstrauch (Himbeerstrauch)
milleifolium (millefolium), Eibiesch (Eibisch),
Färberistel (Färberdistel)

3. 分綴の不自然さ：

Blauk - issen (Blau-kissen), Ruprecht - skraut (Ruprechts - kraut),
Storchs - chnabel (Storch - schnabel), Kaps - tern (Kap - stern),
Schwalbenwurze - nzian (Schwalbenwurz - enzian),
Fra - uenfarn (Frau - enfarn)

VI. 同定作業の一例

ーキャベツを求めてー

愛媛県松山市の南方に位置する久万町の町立美術館は、地方にしては優れた作品を揃えている施設として有名である。伊豫の山林王、井部栄治氏が集めた全作品を町に寄贈し、これを保管、展示するために1987年に建築されたこの美術館には、村山槐多の「裸婦」「芍薬」、浅井忠の「老婆像」と「朝陽」、萬鐵五郎の「裸体美人秀作」の他、藤田嗣次、青木繁、児島善三郎、海老原喜之助、

伊丹万作，黒田清輝，高橋由一，鹿子木孟朗等，日本近代美術史を飾る大家の作品を所蔵している。設立10周年記念に，久万町は岸田劉生の「辰弥之像」を町予算と住民の寄付で購入している。

この井部コレクションの中に，「キャベツ」と題する濱口陽三の版画作品がある。1961年にユーゴスラビアのルブリアーナ・ピエンアーレでグランプリを受賞したものである。

「この作品の名に関して困ったことがある」とは，創立の牽引者であり美術館設立時から館長の任に就いている松岡義太氏の言である。すなわち，井部栄治のリストにあった通り「キャベツ」とキャプションに書いたものの，来訪者から「キャベツではない，ハクサイではないか」との問い合わせが寄せられる。現実には，全く同じ版画作品「キャベツ」は宮城県立美術館にも存在していて，こちらは「ハクサイ」と名づけている。この事情と，オランダに遊学した松岡氏の知人が，これに相違ないとわざわざ種子を送ってきてくれた好意に対する感激を，氏は愛媛新聞に連続掲載されたコラム欄「四季録」で平成8年に書いている。²⁰⁾しかし，この種は拝見するところ，実はシコリ・チコリ・和名キクニガナのものである。種子の入った袋の説明も，Witlof (英語)，Chicore (仏語)，Zichorie (独語)，Brussel Witlof, Holndse Middelvroeg (蘭語)とあり，写真もキク科のCichorium intybusである。ヨーロッパに自生しているこの雑草が軟化栽培されてサラダとして利用されていること，最近では日本の八百屋でも売っていてサラダ菜のエンダイヴと同じ属であること，根は代用コーヒーとしても利用されていることなど，これはこれで話題になる植物である。しかし，拝見した作品の植物とは明らかに異なる。館長室の明るい光の元で仔細に眺めると，シコリとの違いが一層はっきりする。むしろ，葉茎を葉の近くで折り取ったフダンソウを思わせる。

ニューヨーク滞在中であった濱口陽三に松岡氏が宛てた93年3月14日付の「問い合わせ」に対して，濱口自身は3月19日にファックスで返答している。²¹⁾

「... お話の作品の本当の題名はCŒUR de BŒUF 牛の心臓ですが 皆さん色々題名をつけています。と言ふのはこれは牛の心臓の形をしたキャベツのことで，又フランス特産と思ひます」

返事はサンフランシスコからではあったが，当時すでに84歳の陽三翁の言葉は，極めて冷静かつ正確である。キャベツと作者が認識していたのは，これで明らかである。しかも長期にわたってフランス滞在をしている濱口が，フランス語で書いている以上，タイトルはやはり久万美術館が正解ということになる。松岡館長を悩ませていた問題は，これが一体何を指すのか，果たして対応する和名があるか否かであった。

濱口陽三は，1909年和歌山生まれ。1930～36，37～39，53～71，72～81とフランスに滞在している。後の2回はパリに住んだ。81年からサンフランシスコに居住し，近年帰国したとのことである。ブドウ，レモン，サクランボ等の果実あるいは野菜を題材にした芸風が特徴らしい。話題の作品は3回目の滞在の時に制作したものであり，60年に発表した作品によく似たものがあるそうである。²²⁾

フランス語に堪能な同僚たちに協力頂いて確かめたところ、白水社刊行の仏和大辞典では *cœur-de-bœuf* は「レタスの一種」と記載されている。他に *cœur* 心臓・ハートを冠した植物として、*cœur-de-Jeannette*, *cœur-de-Marie* が掲載されていて、ケマンソウと説明されてる。これは、和名ではタイツリソウとも呼ばれる花である。ドイツ語では、*Träendes Herz* (涙するハート)、並んで垂れ下がったピンク色の花をハートと見立てている。肉食文化の国で用いられている「子牛の心臓」は、華蔓草という名の植物がもつイメージとはおよそ合わない。

ラルース百科事典には、*cœur-de-bœuf* を *variété de chou pommé* すなわち「玉になったキャベツの変種」と、*nom vulgare du fruit de l'anone* すなわち「パンレイシの果実を指す俗名」の二種が出ている。後者はイメージとして面白いテーマになりうるが、この場合は当てはまらない。*chou pommé* つまりキャベツについては、*Brassica oleracea* var. *capitata* の学名をあげた上で、変種が数百種も存在していて、その葉は滑らかなものから皺の多いものがあること、成長によって早生・晩成の別、春・秋・冬にわたる収穫期の相違、あるいは結球の形によって丸形、尖頭型、心臓型のあることと説明している。(la forme de leur pomme (ronde, pointue ou en cœur))

一般に *Brassica* アブラナ属の中でも *oleracea* の種名で分類されている野菜には、次のものがある。学名、独語名、和名、英語名で並べてみた。

Brassica oleracea:

Küchenkohl	キャベツ	wild cabbage
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>capitata</i>		
Weißkohl; Weißkraut; Kappes	キャベツ	cabbage
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>capitata</i>		
Blaukraut; Rotkohl	アカキッベツ, ムラサキキャベツ	red cabbage
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>acephala</i>		
Blumenkohl;	ハボタン	flowering cabbage
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>sabauda</i>		
Wirsing (kohl); Welschkohl	チリメンタマナ	Savoy cabbage
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>sabellica</i>		
Grünkohl; Felderkohl; Krauskohl	チリメンキャベツ, チリメンハルナ, ハアザミ	
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>acephala</i>		
Blattkohl; Staudenkohl	ケール	collard, kale, borecole
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>botrytis</i>		
Blumenkohl; Karfiol; Käsekohl	カリフラワー	cauliflower
<i>Brassica oleracea</i> v. <i>cymosa</i>	ブロッコリ	broccoli
<i>Brassica oleracea</i> v. <i>gemmifera</i>		
Rosenkohl; Sprossenkohl	メキャベツ	Brussels sprouts
<i>Brassica oleracea</i> var. <i>gongylodes</i>		
Kohlrabi, Oberrübe, Rübekohl	カブキャベツ, カブボタン, クキカンラン, コールラビ, キュウケイカンラン	turnip cabbage

ハクサイも同じ *Brassica* アブラナ属に入る野菜である。英語名。ドイツ語名, フランス語名ではいずれも中国キャベツを意味する用語が使われている。アブラナ科アブラナ属の植物には以下のものが一般に知られている。

<i>Brassica rapa</i> var. <i>chinensis</i> Chinakohl	ハクサイ; パクチョイ; タイサイ packchoi, Chin. cabbage	
<i>Brassica juncea</i> var. <i>rugosa</i> Serepta - Senf; Wirsingart	タカナ 高菜; カラシナ 〈芥子菜〉 mustard	
<i>Brassica juncea</i> var. <i>sabellica</i> Serepta-Senf	アザミナ, チリメンハルナ 菜, (雪裡紅) southerngiant gurlled, brown mustard	
<i>Brassica napobrassica</i> Dorsche, Schnittkohl	スエーデンカブ, フダンソウ	swede, rutabaga
<i>Brassica napus</i> var. <i>napus</i> Raps; Kohlsalat	アブラナ; ミズナ, コマツナ	rape
<i>Brassica nigra</i> Schwarzkohl, Senf (Senfmehl)	(クロ) ガラシ, マスタード	black mustard

(ちなみに、例に出したフダンソウは普通はアカザ科の *Beta vulgaris* var. *cicla* であり、英名ではビート beet である。種類としてはむしろホウレンソウに近い。)

上記リストに挙がったキャベツ類には、該当の野菜を指すものは見あたらない。ラールの説明を手がかりにして、ドイツ語文献の記載を幾つか挙げてみる。

タベルナモンタヌスが1731年に著した草本 *KRÄUTER - BUCH* には、チリメンキャベツとでも訳すことができる植物 *Krauskohl* の項目中に以下のような説明が載っている。リンネが「植物の種」を出すおよそ20年前の時代のことである。

Krauskohl: *Brassica crispa*, *Brassica crispa prolifera*:

「太い茎には、重なりあった、あるいは縮み多い (子牛の心臓のような) 葉をつける。ある種の葉は上方で重なり合い (しばしば頭のような外見を見せる), ある種の葉はそれぞれが広がったままである。頭型のものは、バイエルンでは *Kappe* と呼ばれ、緑・白・赤色のものがある。根、茎、花、種子はいわゆるキャベツと同じであるが、葉は縮んでいてその縁の切れ込みは、チヂミレタス (*Kraus Lattich*) のように深い種類、あるいはその程度が少ないもの、ほとんどないものに分けられる。」²³⁾

この *Krauskohl* は、上記リストに見られるように *Wirsingkohl* (チリメンキャベツ, チリメンハルナ, ハアザミ) に対して現在でも使用されている名前である。今世紀初頭に15巻の彩色画つき

植物誌を著したシュトルムは、この種類のキャベツに対して以下の説明をつけている。

「Wirsingkohl は, Savoier Kohl (サヴォイ・キャベツ) あるいは Welscher Herzkohl (ベルギー・ハート・キャベツ) とも呼ばれる。緑の葉にはシワがあり, ゆるいボール状となる。」²⁴⁾ベルギーと訳したロマンス語使用圏の地域をあらわす welsch という単語は, この植物がフランス語圏で利用されていたことをうかがわせる。

他方, 19世紀中葉のドイツ語圏で使用されていた植物名を網羅したプリッツェル・イエッセンは Wirsing を [*Brassica oleracea* L. *capitata* *bullata*] のラテン名で分類し, 30個の方言を網羅している。その中に Herzkohl, Savoyerkohl, Kraus kohl の名が見える。すなわち, 心臓キャベツ, サヴォイ・キャベツ, チヂミキャベツである。²⁵⁾

また二人は, *Brassica oleracea* L. の学名のもとに, まず球形キャベツ *B. o. L. capitata* と茎キャベツ *B. o. L. caulescens* の2群にわけ, 前者の中にさらに 1) *B. o. L. capitata alba* = Weißkohl, gemeiner Kohl すなわちキャベツを標準名として挙げている。そのほか, 2) *B. o. L. capitata bullata* = Wirsing, Savoyerkohl すなわちサヴォイキャベツ 3) *B. o. L. capitata purpurea* = Rothkohl, Rothkraut すなわちアカキャベツの3種に整理している。そして第2群には *B. o. L. capitata caulescens* = Stengelkohl を充て, 4) *B. o. L. botrytis* すなわち Blumenkohl, Spargelkohl すなわちカリフラワーとブロッコリー, 5) *B. o. L. caulorapa* すなわちコールラビ, 6) *B. o. L. gemmascens* = Rosenkohl すなわち芽キャベツ, 7) *B. o. L. fruticosa* = Staudenkohl すなわちハキャベツ, 8) *B. o. L. var. acephala simplex* = Grünkohl すなわちチリメンキャベツの5種合計8種に分けている。

そして冒頭の標準名キャベツの項目の中に90個の方言名を以下のごとく整理している。

- (1) 平らな球状をした頭部の形が, 茎と関連するか, これから由来するもの

Chol, Chola, Cholgras, Kahl, Köl, Köle, Köl lkraut Köl krut, Kelkrut, Koahl, Köl-kraut, Koel, Kolii, Kool, Kola, Kole, Koli, Kolo, Koyl

- (2) 頭・ヘッドと関係した命名

Cabass, Cabskraut, Cappess, Cappuss, Capss, Chabis, Kabbus, Coli, Collo, Gabaus, Gabbaskrut, Häpelkraut, Kablesblezen, Kabis, Happeskraut, Hauptkraut, Kappaskrut, Kappeskraut, Kappost, Kapse, Koppkohl

- (3) 特殊な形態, 大きさ, 原産地 に関する名前

Neckarkraut, Schwabenkraut

(4) 深く切れ込みのある葉に関する名前

Ochsenherzkraut (ビュッテンベルク, プファルツ地方, 中部独逸) *

Caminatkraut, Zentnerkabeskraut

(5) 特殊な名前のもの

Spitzkabes, Spitzkohl, Spitzkraut, Zuckerhutkohl

(6) 漬け物ザウアークラウトと関連する命名

Chumpost, Compest, Cuntpisty, Cupestkraut, Compost, Cum, Gemose,

Gampasskraut, Gumpst, Gumpusskraut, Kampest, Kumpost, Kompost

Kompest, Kum, Kumpst, Kums Kohl, Kumst, Kuntpist, Mos, Moesi, Mois, Moist,

Mus, Muschkraut, Muss, Sauerkraut, Schleppkleider, Wasserkraut, Wischhodern,

Wairmois, Warmoes,

(7) その他

Buns Kohl, Cawt, Garderuet, Gartkraut, Kapsamen, Kraut, Krautbletzen, Setzling,

Taterkohl

本論のテーマとの関係で注目すべきは (4) 深く切れ込みのある葉に関する名前 Ochsenherzkraut (ウシノシンゾウ・キャベツ) と (5) 特殊な名前のもの Spitzkabes, Spitzkohl, Spitzkraut である。上記のグループ分けリストでは*印のもの以外は省略したが、この辞典には使用地域も網羅されている。それによると、前者「ウシノシンゾウ・キャベツ」は、ビュルテンベルク、プファルツ地方、中部独逸地方、となっている。すなわち、フランスに近い区域である。

手元にあるこのドイツ植物通俗名辞典は、ライプツィヒで出版されたことは分かるものの、発行年が記載されていない。しかし学名からも分かる通り、リンネが「植物の種」を著した1753年以降であり、グリムドイツ語辞典の中では二人のまとめた仕事の結果がいくつも取り上げられていることから、この刊行以前であることは推定できる。このグリムの辞典には、Ochsenherzkraut の項目で Pritzel/Jessen から引用したことを挙げ、「ビュルテンベルク産のタマキャベツ」と説明している。

他方、この通俗名辞典の記載には、既述のごとく Spitzkohl (尖りキャベツ, 尖頭キャベツと訳すことができる) があり、以下の名前が併記してある。

学名 [Brassica oleracea L. capitata]; Kopfkohl, Kraut, Spitzkabes, Spitzkohl,

Spitzkraut 玉キャベツ, キャベツ, 尖頭キャベツ, と訳せるこれらの名前から、球形に発育する種類のキャベツで、その結球は Kopf (頭・ヘッド) 型から, Spitz (尖り, 尖頭) 型まであったことを伺わせる。なお Kraut は、標準ドイツ語では「草」のことだが、バイエルン州ではキャベツをさ

す。また Sauerkraut が漬け物の「酢キャベツ」を指すことは、一般によく知られている。

また、1967年刊行のベルステルスマン社「図入り植物辞典」では、Kohl (キャベツ) の二種類を以下のように説明している。

「Kopfkohl [Brassica capitata] は球形キャベツであり、Weißkohl (白キャベツ), Rotkohl (赤キャベツ) がある。Wirsingkohl [Brassica sabauda] は、Welschkohl と呼ばれ、葉には著しいシワがあったり、泡状となる。名前は、ローマ時代から用いられていたこの植物の名前、brassica, Braesic が Wirsing となった。(Das Große Illustrierte Pflanzenbuch, Berstelsmann 1967, S.752)」Wirsing の名前については、イタリア語の verna = grüner Kohl (緑キャベツ) からきている、との説もある。²⁶⁾

上記を整理すると、Wirsingkohl の学名は以下のような変遷を経てきたことになる。

Brassica crispa, Brassica crispa prolifera (1732)

Brassica oleracea L. capitata bullata (1860)

Brassica sabauda (1967)

Brassica oleracea v. sabellica (1988)

球茎カンラン、すなわちコールラビの学名は、Brassica oleracea var. gongylodes である。しかし、1939年代に著されたベイリーの「植物名のつけかた」では、この植物に対する学名が、ド・カンドルが命名した Brassica oleracea var. caulo-rapa からバスクアレによって Brassica caulo-rapa と整理された事情を紹介していることから、20世紀になっても植物分類学的に学名を決定することが、流動的であり、研究者の考え方が反映するものであることが伺われる。

他方、Kopfkohl, Weißkohl は、Brassica oleracea. v. capitata であり、これはまたラルース百科事典でいうラテン名とも一致する。キャベツの一品種と言うときの基準種として挙げた名前である以上、これは当然と言える。「牛の心臓」のテーマとの関係で見たとき、ブリッツエル・イエッセンがこれを Spitzkohl (玉キャベツ, キャベツ, 尖頭キャベツ) と呼んだ時の学名 [Brassica oleracea L. capitata] と、Wirsinnng を [Brassica oleracea L. capitata bullata] と整理した事情を考えると、この両者が極めて近い種類と考えられていたと推定できる。そして、葉脈がはっきりあらわれた葉が縮れ、結球し、その形態が縦型に伸び、先が尖った形に成長する種類のキャベツを、その形態から連想して「子牛の心臓」と呼んだ、ということは十分に考えられる。

Spitzkohl の名前は、20世紀に入って刊行されたマイヤー、ブロックハウスの百科事典には項目としては登場しない。しかし、1972年刊行のブロックハウスの Gemü (野菜) の項に添付されたカラー図版には、Spitzkohl が載っている。牛の心臓型をしている、と思ってみるとそのようにも

見える。濱口作品との共通性も高いように思われる。

ではこれが、和名では何と呼ばれているか、あるいは呼んだらよいか、は今のところ不明である。

(追) フランスの料理本によく出てくる野菜である、そちらを調べてみたらいかがか、また印象主義画家の作品で見た気がする、とは敬愛する同僚の安東氏の助言である。園芸種を販売している大手の企業に問い合わせてみたらいかがか、とフランス語の先輩からもアドバイスを頂いた。自分はいわば Spitzkohl を食べて大きくなったようなものだ、とはヴェストファーレン出身の同僚 Becerra 女史の言である。他方バイエルン州あるいはオーストリアから来ている知人は聞いたこともない野菜だという。フランスに出かけることも含め、調べなければならぬことがまだ続きそうである。

註

1. 杉本 49頁以下 2. 湯浅 16頁以下 3. 同 122頁 4. 金城 59頁, 湯浅 144頁, 76頁
5. 誠文堂新光社 I-363頁 6. 湯浅 77頁 7. ベイリー 77頁 8. 塚本, 第3巻月報 6頁
9. 塚本 V-215頁 10. ベイリー 119頁 11. 塚本 III-110頁 12. ベイリー 36頁 13. 同110頁
14. 牧野 正87頁 15. 牧野 正349頁以下 16. 湯浅 129頁 17. 山原 52頁 18. ベイリー 10-11頁
19. 牧野 続239頁 20. 松岡義太 平成8年月1日より9月31日までの毎土曜日を担当。キャベツは第11回に掲載。
21. 松岡氏より送信いただいた濱口ファックスによる。 22. 濱口展示会用の資料に基づく。
23. Tabernaemontanus 787頁 24. Sturm VI-136頁 25. Pritzel/Jessen 64頁以下
26. Sturm VI-136

参考文献

- 1) 原 弘毅, 植物に現れた獨逸趣味の研究 岩波書店 昭和5年
- 2) 牧野富太郎, 植物記 正統 櫻井書店 第2版 昭和21年
- 3) 塚本洋太郎総鑑修, 園芸植物大事典 1~6 小学館 1986
- 4) 堀田満代表編集, 世界有用植物事典 平凡社 1989
- 5) L. H. Bailey 著・八坂書房編集部訳, 植物の名前のつけかた 八坂書房 1997
- 6) 石井 林寧・井上頼教, 最新園芸大辞典 誠文堂新光社 第8版 昭和53年
- 7) 林弥栄鑑修, 原色樹木大図鑑 北隆館 第2版 昭和62年
- 8) 安部 薫, シェイクスピアの花 八坂書房 1997
- 9) 金城 盛紀, シェイクスピアと花 東方出版 1996
- 10) 豊国秀夫編, 植物学 ラテン語辞典 至文堂 昭和62年
- 11) 文部省・日本植物学会, 学術用集 植物学編(増補版) 丸善出版 平成2年
- 12) 中平 解, フランス文学にあらわれた動植物の研究 白水社 1981
- 13) 杉本秀太郎, 花ごよみ 講談社 東京 1994
- 14) 加藤 憲市, 英米文学植物民俗誌 富山房 東京 昭和51
- 15) 加藤 さだ, 英文学植物考 名大出版会 1985
- 16) 中村 浩, 植物名の由来 東京書籍 1980
- 17) 湯浅 浩史, 花の履歴書 講談社 1996
- 18) 春山 行夫, 花ことば-花の象徴とフォークロア 平凡社 1996
- 19) 菅野 邦夫, 花の名前にご用心 アボック社 1995

- 20) 山原 茂樹, 独日植物名対照表 鹿児島独仏文学論集 VERBA No.10 1987
- 21) 岩槻 邦男, 植物からの報告 日本放送出版会 1994

- 22) J. T. Tabernaemontanus, Kräuterbuch, 1731 Verlag J. L. Koenigs (Reprint 1975, München)
- 23) Pritzel, G. u. G. Jessen, Die deutschen Volksnamen der Pflanzen 2. Ausgabe, (1860?) Leipzig
- 24) K. G. Lutz, J. Sturms Flora von Deutschland, Verlag K. G. Lutz 1906
- 25) H. Potoni, Taschenatlas zur Flora von Nord- u. Mittel-Deutschland, Gustav Fischer 1923
- 26) W. Naummeister, Das Grosse Illustrierte Pflanzenbuch, Berstersmann Verlag, Gütersloh 1967
- 27) P. Macusa, Elsevier's Dictionary of Botany I. Plantsnames, Elsevier Scientific Publishing 1979
- 28) R. Fitter u. a., Pareys Blumenbuch, Paul Parey Verlag. 2. Aufl. Hamburg & Berlin 1986
- 29) Brockhaus Enzyklopädie 25 Bde., Wiesbaden 1967
- 30) Meyers Enzyklopädisches Lexikon 25 Bde., Bibliographisches Institut, Mannheim/Wien/Zürich 1979
- 31) Grand Larousse Encyclopédique, Librairie Larousse, Paris 1960